



TITLE:

中国正史の災異史料における建物用語の変遷(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

塚本, 明日香

CITATION:

塚本, 明日香. 中国正史の災異史料における建物用語の変遷. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19064>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要旨は
2015/03/25に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	塚本 明日香
論文題目	中国正史の災異史料における建物用語の変遷		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本申請論文では歴史時代中国に、広く存在したであろう一般的な建物に関する用語について考察を試みている。特別なものではなく一般的な建物に言及する記録は少なく、中国正史における災害や異常事態の記録(災異史料)を通して、そこに表れる建物に関する記事を分析している。全体は四章構成であり、各正史に見られる記述内容や記事数及びその変化を順に考察している。</p> <p>第一章では、個人的編纂から国家編纂へと正史の存在意義が確立していった唐代を区切りとして『北史』までを扱っている。この時代の史書は各歴史家たちがそれぞれの意図や思想をもって編纂しており、歴史家個人の価値観が反映される。初期の正史は災異史料自体が少ないが、『漢書』において五行志が編まれたことが大きく影響して、次第に記録の数が増えていくことが明らかにされた。</p> <p>五行にまつわるあらゆる事象を記録する五行志が作られ、またその後の正史の編纂にあたって概ね踏襲されたことで、災異現象の記録は正史の中で少量ながら慣例化する。そこで記される用語には、建物を表すという以上の制約が見られない「廬舎」や、主に特定一軒を示す場合に使われた「～家」、建物全体ではなくどこか一部分に注目するときに使われた「屋」といった語が使用されていることを指摘している。このことから建物に対して特定か不特定か、または建物全体かその一部か、という区別があったことを明らかにしている。</p> <p>この時代以後、建物用語を含む災異史料は『宋書』『晋書』のような例外を除いて、七世紀頃まで『漢書』や『後漢書』とそう変わらない水準で記述されたことを指摘し、この頃、五胡十六国といわれるように非漢族の王朝も多かった北方の記録では、南方より記述数が少ないという傾向も見出している。</p> <p>第二章では新旧の見比べが可能な『舊唐書』から『新五代史』が取り上げられる。『舊唐書』『舊五代史』の編纂期と『新唐書』『新五代史』の編纂期の隔たりは百年に満たないが、唐宋変革と呼ばれる中国社会の一大変革期を挟んでおり、その間で新たに「民居」の語が使用され定着することが確認されている。</p> <p>「民居」は現代中国語でも住宅を示しており、「居民」と通用する等、人との結びつきが強い用語である。「民」とは官職を持たない大多数の人々を示す。この用語が出現し定着したことについて、それは非任官の人々の存在について記録を残す側が無視できなくなったということを示しており、建物をあらわす時に、そこに民が居るか否かという区別が新たに加わったと解釈している。宋代は印刷術の発展に裏付けられて記録量が膨大になる</p>			

一方、庶民文化が花開いたともいわれ、その時代に編纂された『新唐書』から「民居」の語が定着するというのは、時代の流れに合致した結果であることを指摘している。

第三章は『宋史』において10件以上の用例のあった語について考察を試みている。「廬舎」「民舎」「民廬」「民居(居民)」「田廬」「～家」「屋」の7種類の語が分析されている。特に「民居」だけではなく「民舎」や「民廬」といった用語が現れていることから、非任官の人々に関わる建物に対してより多様な捉え方をするようになったとしている。そして、民が日常的に居るかどうかかわからないような建物まで含む場合には「民舎」、民の建物の中でも特に簡素なものを「民廬」といった等という解釈が示されている。

第四章ではその後の支配民族の交代があった時代の史書を扱い、『宋史』を軸に『遼史』『金史』『元史』といった、非漢族が支配者層であった王朝史とを比較し、また『明史』との用語の差異について検討している。

非漢族の三史では、『元史』から新たな枠組みの萌芽であるとみられる「房舎」の用例が確認できることを見出している。「畜」とセットで用いられており、家畜小屋ないしそれに類するような建物が、遊牧民と接することで意識されるようになった可能性があることを指摘している。『明史』と『宋史』の比較では、淘汰された用語や新たに生じた用語を確認している。

以上のように、本論文で確認され、明らかにされたことは基本的に東洋史の分野で言われてきたことの再確認とも位置づけられる。民衆が力を大きくしてくるのを背景に彼らに関する記録数が増えてゆき、技術発展に支えられて個人の意見が広く記述できるようになると同時にものの捉え方も多様化する。その後、北方民族との衝突によって新たな枠組みができて、価値観は次々に代謝されていく。このような中国史の流れそのものが正史における災異史料に収められた建物に関する記録にも反映していることを見出している。

正史という基礎的な文献の中であまり注目されてこなかった災異史料に着目し、そこから建物用語の変遷を読み取ることで、こういった一連の流れを改めて確認している。

(論文審査の結果の要旨)

本申請論文は中国正史の災異史料を用いて、それぞれの時代における官僚たちが一般的な建物についてどのように捉えていたかを明らかにし、その価値観の変化を探ろうとしたものである。中国の古代建築については、王宮、寺院に関する研究や考古学的発掘資料にもとづく研究はあったが、庶民の住居など一般的な建物を、大きな広がりによって総体的に扱う研究はほとんどなかった。中国正史の災異史料に着目して上記観点からの研究を可能にしたことは、この論文の著者の独自性を示しており高く評価できる。また、二十四史全てに目を通すという膨大な作業を綿密におこなっており、この点も評価できる。

本論文は四章からなっており、第一章では『史記』から『北史』までを分析している。初期の史書群は記事数が乏しく、用語ごとの解釈が困難な状況であるが、その中で記事数の変遷に注目し、建物の描写を含む災異史料が『漢書』から収録されていることをするどく指摘している。また、記事数の違いから中国大陆における南北差を指摘し、そこに漢族と非漢族の差を読み取っており、用例数は少ないものの興味深い指摘といえる。

第二章では『舊唐書』から『新五代史』までを取り上げている。同じ時代を対象としながら編纂された時期の異なる二書をそれぞれ丹念に比較している。特に記事数の拮抗する『舊唐書』と『新唐書』の比較から現代中国語でも使用されている「民居」の語を見出したことは言葉のルーツとしても興味深い。同一内容を示す記事を列挙して論考しており、「民居」を使用する場合は人との結びつきの強い記事が多いことも明らかにしている。これらのことを民が重視されるようになってきたことを端的に示す事例として緻密に読み取り、史書編纂期の社会変化との関連を示唆している。なお『舊五代史』と『新五代史』では比較にならない記事数の差があることから、私選史書では個人の思想が反映された可能性を指摘している。

第三章では『宋史』災異史料における建物用語に関して述べている。全496巻に及ぶ正史最大の史書を全文確認していることをまずは評価する。章ごとの特徴も端的に示しており、512件の記事を適確に分類している。用例の多い7種類の用語について考察しており、単純な記事群から「民廬」の物理的な特徴（水害で「漂」と評されるような被害が明らかに多く、水に浮かび漂うような軽い材で作られていた）まで言及できていることはこの論文の成果といえる。他の用語についても概念的な使い分けを土地私有制度のような社会制度も念頭に置きながら検討しており、宋代に価値観が多様化していることをよく示す結果となっている。用語の変遷という視座からの研究であることが最も効果的に成果に結びついた章といっていよい。

第四章では『宋史』から『明史』までを論じている。同時代史料が格段に増える時

期の史書であるが、災異史料にのみの的を絞り込んで論点を鮮明にしている。この時代には「房」に関する用例が出現し、これらが遊牧文化との衝突による、家畜のいる場所への新たな眼差しではないかという興味深い指摘を行っている。大きな多様化を見せた『宋史』から用語の淘汰が起こっていることについては、さらなる原因の究明が望まれる。

本論文は中国の庶民の住居等の建物を通史的に明らかにするという新しい研究領域を拓いている点で高く評価でき、正史災異史料を通読して分析するという方法も妥当なものである。また、宋代以降については絵画や他の文献資料との比較検討を行うことで今後の大きな展開も期待できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 2015 年 3 月 25 日以降